OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小堀遠州と「きれいさび」 : 美的概念用語の成立過程
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	茶の湯文化学. 2005, 11, p. 41-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24308
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小堀遠州と「きれいさび」
――美的概念用語の成立過程――

岩井茂樹

はじめに

小堀遠州（一五七九～一六四七：以下遠州とする）は、大名系茶道（武家茶道ともいう）を代表する人物であり、「きれいさび」（引用文、著作物のタイトル以外はこの表記を用いる）という言葉は彼の美的センス（好み）を表現する常套句となっている。例えば、平成六年（一九九四）五月号の雑誌『なごみ』は、「きれいさび」という特集を組んでいるが、その副題は「小堀遠州の試み」であった。また、平成八年（一九九六）に遠州三五〇回忌を記念して行われた展覧会のタイトルは「数寄大名小堀遠州の美学『綺麗さび』展」であったし、同年二月の『芸術新潮』（第四七巻第二号）は「謎の達人小堀遠州」と題する特集号であるが、その第四章は、「〝綺麗さび〟という美」と題されている。平成一一年（一九九九）七月号の『淡交』（第五三巻第七号）は、遠州の特集であるが、そこにも中村利則「遠州潜像――綺麗さびの世界」という一文が掲載されている。このように、「きれいさび」という言葉は、現在遠州に対してのみ使われる用語である、と断言してよさそうである。例外として遠州以外に一人だけ「きれいさび」と評された人物がいる。建築家、村野藤吾（一八九一～一九八四）である。作家の井上靖（一九〇七～一九九一）は、村野の趣味（身につけている物）を「きれい寂び」と評した。[1] しかし、これは特別である。このような例外はあるにしても、「きれいさび」という言葉が使われる場合、そのほとんどが遠州の美意識をさすという事実に変わりはない。にもかかわらず、誰がいつからこの言葉を使い始めたのかは、いまだに明らかにされていない。これは遠州流茶道宗匠、小堀宗実（一九五六～：遠州茶道宗家一三世家元）が、「『綺麗さび』ということばはだれが言い出したのかわからないのですが、いつの間にか、遠州のお茶は『綺麗さび』といわれるようになりました」[2]と、語っているところからも明らかである。

実は、この「きれいさび」という言葉が使われはじめたのは、大正時代になってからのことで、それ以前には全く見られないものである。「きれいさび」という言葉が定着する以前は、もっぱら「遠州好み」という言葉が使われていた。とりわけ、遠州が活躍した時代、つまり江戸時代には一度たりとも、「きれいさび」という評語が用いられた事実はない。本論稿は、どの

ようにして遠州の美が「きれいさび」という言葉で語られるようになったのか、その過程を解明する事を目的とする。尚、本文中の人名については、すべて敬称を略す。

「きれいさび」とは？

「きれいさび」とは、どのような美をいうのであろうか。まずは、いくつかの辞書でみてみよう。『原色茶道大辞典』では、「華やかなうちにも寂びのある風情。また寂びの理念の華麗な局面をいう」[3]とある。また、『角川茶道大事典』によれば、「閑寂・古淡の中に優しさ・麗しさ・華やかさ・清らかさのある風情」[4]とある。『建築大辞典』には、「きれいさび」→「ひめさび」とあり、その説明として、「茶道において尊重された美しさの一。普通の寂びと異なり、古色を帯びて趣はあるけれど、それよりも幾らか綺麗で華やかな美しさ。遠州好み・宗和好みがこれに当る。『綺麗寂び』ともいう」[5]とある。

ちなみに、小学館の『日本国語大辞典』は第一版（昭和四七～五一年）、第二版（平成一三～一四年）ともに、「きれいさび」という項目はない。茶道、建築、造園など、ある特定の分野ではよく使われる言葉であるが、まだ一般的には通用しない語である、といえよう。

では、一般の刊行物ではどうか。茶道研究家、建築家などの意見を見てみよう。

堀口捨己（すてみ）（一八九五～一九八四）は、「そのころあった茶人に比べて、奇麗というような言葉で分けられる好みの著しさが、遠州好みであろうと思う」[6]と述べている。綺麗と思われる要素が、他の茶人よりも遠州には強く感じられると、堀口はいうのである。

村井康彦（一九三〇～）は、「遠州の好んだ美的世界は、たとえば大徳寺龍光院に営んだ孤篷庵の茶室忘筌とその庭などに、もっともよくうかがうことができよう。『忘筌』という名も、利休の斎号『抛筌』にみられる意思的な要素が薄れて詩趣さえ感じさせる。しかもその好みには、織部に見られたような作意は目立たない。その意味で遠州の好んだ『きれいさび』は、求道的な利休と破格の織部とを綜合した近世的な美意識であったといえよう」という[7]。また、別のところでは、「遠州は何事であれ、『きれい』であることを求めた。それが茶碗であれば利休の黒茶碗のような重々しさではなく、といって織部の沓型茶碗のようにデフォルメが過ぎてもおらず、高麗茶碗に見るような『さびた』美の『きれいさ』、いわゆる『きれいさび』である。その意味では遠州の世界は、利休と織部のそれを止揚したところに生まれたといえそうである。そして遠州の『きれいさび』は、やがて俳諧の世界に出現する『さび』『不易流行』の風雅に先んずる美意識として位置づけられるものがあるように思う」とも、いっている[8]。利休と織部によって作られた茶道の

よいところを合わせた、偏りのない美意識、それこそが遠州の「きれいさび」である、というのが村井の解釈である。

江守奈比古（一九〇二～一九九二）も、村井とほぼ同様の解釈を示している。「小堀遠州は、古田織部の流れを汲みながらも、織部の行過ぎを適当に是正し、醇化した美しさを茶風に加えた点で、特筆すべきものがある。遠州の美は内に蓄えられた高い文化性が底光りを放っており、表面的な軽薄な美と全く異なっている。遠州の美を綺麗寂（きれいさび）と称するのはこのためである。砥ぎすまされた美しさにも、また反対に利休式の無一物的表現にも、高い文化性の裏づけがあってこそ始めて、我々が首肯できる落着いた侘びの姿となるのである」と述べている。(9)

熊倉功夫（一九四三～）は、「遠州のお茶というものを考えるときよくいわれる言葉に〝綺麗さび〟という言葉がございます。（中略）いわれてみればなるほど、遠州の道具というものをみますと、ああきれいだなという気持がいたしますから、まさにふさわしい、いい言葉だと思います」と述べた後、「わたしはこの〝綺麗さび〟のなかみは、すぐれて都会的に洗練されている美しさであろうと考えます。で、そういう都会的な洗練された美しさには、華奢な面がある。（中略）そういう華奢な美しさ、それは同時に平衡感覚がとれている、バランスがいい美しさであると申せましょう」という。(10)

次に、遠州流家元の意見を見てみよう。小堀宗慶（一九二三～：遠州茶道宗家一二世家元）は、「遠州の茶風は、一言で申しますと『綺麗さび』とされ、『綺』とは綾絹のように上品で、幽美、品格があることであり、『麗』とは左右対称にはえそろう鹿の角のように、端正で、厳しさも併せ持つものとされています」(11)、あるいは「遠州以前にあった侘び、寂びの心を心とし乍らも、綺麗さを加えたものが遠州の茶道であった」(12)とする。現家元宗匠である小堀宗実は、「寛永年間という王朝文化の復活した時代に生きた遠州の茶は『綺麗さび』と呼ばれます。それは、見た目の綺麗さだけでなく、心の綺麗さ、清らかな心を問うものでした。『綺』とは綾、綾絹のことで、上品、品格のあるものを表します。『麗』は、鹿が二頭整然と連れ立って歩いている様、鹿の角が左右均衡に揃っている状態。つまり、綺麗とは綾があって美しい、汚れがない、潔い、公正できっぱりしているというような意味合いです。（中略）利休の削りに削ったわび・さびの茶に、『艶』を与えたのが遠州の『綺麗さび』だったと思います。その『艶』とは、客観性、バランス、調和と言い換えることができるでしょう」という。(13)「綺麗」の字義から説き起こし、品のよさと、バランス（調和性）を強調しているのがはっきりと見て取れる。

これらと少し違う見解も二、三紹介しておこう。一つは、小田栄一（一九二九～）のものである。小田は「小堀遠州が好ん

だ色の代表として『白』が考えられよう。それは利休の好んだ楽茶碗に代表される『黒』、そして織部の大胆な意匠による織部焼の『緑』とは明らかな違いを見せている。（中略）遠州の好んだ『白』がイメージするものは、『洗練』『気品』『清潔』『明るさ』であり、遠州の『綺麗さび』の世界がここにある」という。[14] この意見は、表現こそ違うものの、先にあげた村井や江守の解釈と同じである。つまり、利休、織部が目指した美の対角線上に、遠州を置くものである。

いま一つは、宗政五十緒（一九二九～二〇〇三）によるものである。宗政は、遠州が上冷泉家の流であることに着目している。宗政によると、当時二条派は『古今和歌集』を範とし温雅な詠風であったが、冷泉派は『新古今和歌集』を範とし、清新な詠風を志向していたという。そして、遠州の創り出した美の世界には、『新古今和歌集』のもつ美の世界を志向する姿が発見できるといい、加えて次のようにいうのである。「『新古今集』は知られているように『実』よりも『花』の勝った歌集である。遠州好みの『きれいさび』というのは、まさしく『花の勝ったさび』ではないだろうか」と。この仮説は、従来遠州の美というと、彼が関与したと思われる庭園や、建築、そして遠州ゆかりの茶道具などから推察する向きが多かったのに対し、遠州を一人の歌人としてとらえなおすことにより、遠州の歌の素養が彼の美意識に大きく影響していたのではないかとする斬新な意見といえよう。

以上の意見から、大まかではあるが「きれいさび」とは何かということを、まとめておこう。畢竟、「きれいさび」とは、利休や織部の茶から脱却し、独自の境地を開いた遠州の美に対して用いる言葉で、その内容は、枯淡な部分の中に華やかさが見え、品格があり、バランスのよい風情があるもの、と一応考えておいてよさそうである。

では、「きれいさび」という言葉の由来については、どのように説明されているのであろうか。「きれいさび」という言葉が、「きれい」という語と、「さび」という語からなる言葉であることは、今更いうまでもない。しかし、「きれい」は本来漢語であり、「さび」は和語である。したがって、ともすれば不自然な造語ともなりかねないのであるが、この言葉に違和感を覚えないのは、何とも不思議なことだ。

「きれいさび」という言葉の由来、特に「きれい」という語が、遠州に冠せられたという事実については、以下に示す二つのうち、いずれか一方の説明がなされるのが常である。

一つは、狂歌、あるいは道歌説。江戸時代後期にひろまったとされる狂歌に次のようなものがある。「織理屈、綺麗キツハハ遠江（とおとうみ）、於姫（お）宗和ニ、ムサシ宗旦」というものである。これは堀口捨己が、『茶道流義之事』（著者、成立年未詳、静嘉堂文庫所蔵）中に発見した言葉である。[15] 意味を簡単に見ておこう。織

は古田織部（一五四四～一六一五）で、彼の茶は理屈っぽいという。そして遠江は、遠州のことで、綺麗キツハとは「切れ味のよい刃物」を意味するといわれる。[16] しかし、宝永元年（一七〇四）刊『当流茶湯独槽』に「飛石流儀有。遠州流はキツパリとして見ゆるなり」という文言があることが、西堀一三（一九〇三～一九七〇）によって紹介されている。[17] 恐らくこの「綺麗キツハハ」の部分は、「きれいで、キッパリとしている」という意味ではないだろうか。宗和とは、金森宗和（一五八四～一六五六）のことで、彼のおとなしく、華麗な公家風の茶を行なったことから、彼の茶は「姫宗和」と形容された。そして、ムサシとはむさくるしい、という意味であろうが利休の孫の千宗旦（一五七八～一六五八）がしばしば「乞食宗旦」とよばれたことから来た評語であろう。無一物の所謂「わび茶」と称されるものをさすと思われる。このように、遠州の茶は、綺麗と形容されていたことがわかる。[18] しかし、この書物は広汎に知られている書物ではなく、後の遠州評価に影響を与えたとは考えにくいのではないだろうか。

もう一つは、『山上宗二記』の「茶湯者覚悟十体」などに見られる「心ノ内ヨリ奇麗数奇」に由来するという説である。[19] 小堀宗実などは、この言葉を「わび茶の祖・村田珠光」の言葉として、この説をとっている。[20]

では、「さび」はどうか。「さび」の部分が、なぜ「わび」でなく、「さび」なのか、ということについては、通常ほとんど説明がなされない。ただし、事例がまったくないわけではない。茶道研究家、古賀健蔵（一九三一～一九九九）は、「小堀遠州きれいさびの心」という文中で、次のように説明している。少し引用が長くなるが、「きれいさび」の「さび」の部分を説明している稀有な例として、ここに紹介しておきたい。

歌道における「さび」の感覚的性格と精神的意思の交叉するところに「きれいさび」が成立するのである。その心のあらわれ方は暗示的象徴的であり、そこには精神的な力の崇高さが秘められている。確かに「さび」は諦観的な静寂への途をたどり、「わび」が持った生命力の解放とは異なる美の局面を示している。甚だ抽象的表現であるが、室町から桃山期へのエネルギッシュな下克上の世界には無限の可能性とその憧憬があった。しかし、慶長以後の幕藩体制の確立は、人々をして、身分地位の枠の中に押込められたのである。もはやそこには階級的な変化や、職業の移行も許されなくなった。むしろ枠間での閉鎖された社会に抑え込まれ、そこに独自の精神的・感覚的世界を打ち建てることが求められ、ここに江戸的「さび」の展開がなされたのである。このような心の形象化は「好み」となって道具にあらわされた。利休や織部の「わび」の世界にはみられなかった、沈静化した静寂な境地が出現した。遠州の「きれ

いさび」の心は必然的に優美の局面をみせながら、対象、つまり道具は整斉な姿を保ち、和漢兼備はむしろ中庸のもつ協調性を生み出したといえる。それは遠州の確固たる茶湯への志と覚悟を前提としたものであり、同時代の織部・宗旦・宗和・石州などとも異なる個性的表現であった。[21]

古賀は、「さび」である必然性について、主に二つの要因を挙げている。一つは、時代的な風潮が「さび」たものを求める気風になっていたというもの。いま一つは、利休をはじめとする「わび」茶とは異なり、遠州の茶が独歩のものであったというもの、である。いずれも「わび」とは異なるという意識を「きれいさび」という言葉の中に、積極的に見出だそうとしている。江守奈比古も、遠州の好みが「大名らしい綺麗寂という方面にあつて、當時の侘數寄一方の宗旦のよき對照であつた」[22]といっており、「さび」が「わび」とは異なるもの、と考えているのである。茶道において、「さび」という言葉は、『石州三百條』に「茶湯さひたるハよし、さはしたるハあしき事」[23]、五世藪内紹智（一六七八～一七四五）の『源流茶話』上巻に「さひたるはよし。さはしたるは悪し」[24]とあるのが有名である。他には、籬島軒秋里（生没年未詳）の手による『築山庭造伝　後編』上「茶庭造り様の事并木戸路地の事」に、「茶の間の庭ハ極寂にして而巳（のみ）真の造り方なし」[25]とある。

つまりは、こうである。遠州の茶を表す言葉に「きれい」があり、千家流茶道などが標榜する「わび」とは異なる茶の理念「さび」が結合して、「きれいさび」という言葉が造られた、というのである。

遠州への道程

現在、「きれいさび」という言葉が、もっぱら遠州に対して用いられる言葉であることは、すでに述べた。では、最初に遠州の好みを「きれいさび」と評したのは誰だろう。これに関して、全く手掛かりがないわけではない。『角川茶道大事典』「小堀遠州」の項に、「遠州の茶風は、明るく大らかで軽快であった。それを『きれいさび』という言葉でとらえることが、ことに江守奈比古氏の著書を通じて今日では通説化している」という記述がある。[26]まずは、それを手掛りとして「きれいさび」という言葉のルーツを探ってみよう。江守の著作の中で「きれいさび」という言葉が初めて用いられたのは、昭和一四年（一九三九）四月に発売された、東洋美術文庫中の一冊、『遠州』中においてである。その箇所を引いてみよう。

之等遠州の好みを綺麗寂びと名附けませう。この綺麗寂びこそは遠州がのこしたもの、全部を云ひ表はす言葉であり、これは、利休、宗旦の流には無いものであり、又遠州の師たる古田織部も拓かなかつた新生面であり、而も彼の後継者たる片桐石州、金森宗和、松平不昧と雖も到り得なかつ

た独歩の境地であります。同じ綺麗寂びと申しても遠州と宗和では横綱と三役の差があります。それ程遠州のは堂々として居つて而も重くありません。[27]

江守は茶道、茶室研究家として、また実業家としても活躍した人物である。本名を江守名彦といい、花外亭と号した。この文章でもっとも注目すべき箇所は、「遠州の好みを綺麗寂びと名附けませう」という部分である。この言動は、彼がこの用語をつくり、その使用を提唱した可能性があることを窺わせる言い回しである。江守は他の著書の中でも、「遠州の茶を稱して綺麗寂びということはよい言葉であると思う」[28]であるとか、「ここに著者のいう『遠州美』、遠州の『綺麗寂び』が存するのである」[29]といっていることからも、彼によってつくられた言葉ということも十分考えられる。[30]ところが、実際はそうではない。後述するが、「きれいさび」という言葉は、江守によって作られた言葉ではないのである。だが、これ以降、つまり昭和一四年以降に、遠州を評する言葉として定着したのは、まず間違いないところである。それは、以下に挙げるいくつかの用例からわかる。西堀一三『日本茶道史』（昭和一五年九月刊）には、「世の遠州を評する語に『綺麗サビ』の言葉がある」[31]、同一六年五月発行の雑誌『建築史』誌上、森蘊（おさむ）「小堀遠州の造庭」という論稿中に、小堀遠州の造庭技巧について「所謂『綺麗さび』なる語はけだし適評といへるであらう」[32]とある他、同年七月発行、雑誌『庭園と風光』誌上に掲載された、眞鍋堅介「小堀遠州の茶道」という文章中に、「遠州の茶事は『綺麗サビ』と呼ばれた程の形式美であつたけれど、遠州が其の『綺麗サビ』の中で探究して行つた修身・處世の観念の深さは眞に高く評價さるべきものがある」[33]という記述が見える。また、終戦直前の昭和二〇年（一九四五）一月に刊行された、建築家、藤島亥治郎（がいぢろう）（一八九九～二〇〇二）による『桂離宮』にも、「庭石の形とその敷き方にも遠州流の所謂『きれい澁び』（ママ）と建築的な造詣意識が見られる」というものがある。[34]ちなみに、藤島は昭和三三年（一九五八）発行の『日本の建築』では、遠州のそれを「明る寂び」と表現している。[35]「明る寂び」という言葉は、昭和一七年（一九四二）に刊行された哲学者、山口諭助（一九〇一～一九九六）の『美の日本的完成――「寂び」の究明』で使用された言葉であり、[36]藤島はそれと混同した可能性がある。さらに、造園家であり、同時に庭園史研究家でもあった重森三玲（一八九六～一九七五）は、昭和二四年二月に『小堀遠州』という本を出版しているが、ここには「利休は侘一式を主張し、織部は侘に對してやゝ明朗性と変化を主張し、遠州に至つて奇麗さびを主張してゐる」という表現が見られる。[37]

これらの事例から昭和一四年以降、二〇年代にかけて、遠州の美意識を表現する用語として、「きれいさび」という言葉が定着していったことがわかる。

では、「きれいさび」という言葉は、初めから遠州に対してのみ、冠せられた言葉であったのであろうか。次にそれを考えてみたい。

実は、「きれいさび」という言葉をつくったとまでは確言できないまでも、最初に世に広めたのは、高橋義雄（箒庵：一八六一～一九三七、以下「箒庵」とする）であった。彼が最初に「きれいさび」という言葉を使ったのは、『東都茶道記』大正二年（一九一三）一二月二六日に行なわれた「為楽庵歳暮茶会」と題する文章中においてである。初めてこの言葉を使われたのは、赤絵呉州の香合に対してであった。その文章は次の通り。

赤絵呉州の香合は中赤球などより丈け高く、品も一段立ち上りて綺麗寂びの有り難さ、遠州蔵帳にでもありさうな逸品なりき。(38)

「遠州蔵帳にでもありそうな」といっているので、遠州と全く関係ないとは言えないものの、「きれいさび」という言葉が、遠州の美意識に対してのみ用いられているわけではないことがわかるだろう。さらに、箒庵はその晩年にいたるまで、この言葉を特定の人物や、時代と結びつけなかった。昭和一〇年（一九三五）に刊行された『趣味ぶくろ』における記述から、それがわかる。

古来日本人が外国より輸入し来りて我が國寶と爲したる一切の美術工藝品は、皆な此寂味を以て洗擇の目標と爲し、例へば支那陶器中、染付、赤繪の如き綺羅びやかなる作品にても、往時日本に輸入せられて、茶人の賞翫を經たる者は、形状に於て将た色彩に於て、派手なる中にも自から一種の寂味を含み、所謂綺麗寂びの種類に屬する者多きは、人の能く知る所である。(39)

では、箒庵が遠州の茶をどう観ていたかといえば、一言、「華麗」であった。(40)

箒庵は、大正一〇年（一九二一）一二月から刊行が始まった『大正名器鑑』の中でも、「きれいさび」という言葉を使っている。例えば、三井高保蔵「馬蝗絆　青磁」に対しては「大疵茶碗に鎹を打ちて其疵を生かし、終に一個の名物を作成したる物数寄、感ずるに堪へたり。彼の所謂綺麗寂びとは、蓋し此等の茶碗に該當さる文字なるべし」(41)、馬越恭平蔵「釘彫　伊羅保」に対しては、「稍小形なれども濃薄両様に適して、茶人の所謂綺麗寂びとは斯かる茶碗を云ふなるべし」(42)と評している。

『東都茶会記』、『大正茶道記』、『昭和茶道記』では、計二一回の茶会に対して「きれいさび」という言葉が使われているが、その内の一二例が秋から冬にかけて行なわれた茶会、つまり名残、あるいは歳暮の茶会（口切茶会には使わない）に対して用いられている。(43)特に、名残、もしくは名残の趣向で行なわれた茶会が七例ある。(44)どうやら箒庵は、「きれいさび」という言葉を使用するのに最もふさわしいのは、名残の茶会である、と考

えていたようである。箒庵の次の文章に、その姿勢がよくあらわれている。

> 総じて茶事は風炉名残程面白き者なく、庵主の力一杯に趣向を施し得る次第なれども、本来晩秋幽寂の趣を現はすが其主眼とする所なれば、道具は総て寂味を帯ぶると同時に、彼の汚寂は禁物にして、所謂綺麗寂ならざるらず。(45)

ところで、「きれいさび」という言葉が、箒庵の造語ではない、という可能性もまったくないわけではない。道具商、茶人たちの間で語られていたものであったことも、十分考えられる。古美術の用語に、「きれいもの」、「さびもの」という分類があることから、両方の性質を持ち合わせた器物を言いあらわす専門用語として「きれいさび」という言葉がすでにあり、それを、箒庵が茶会や飾付を評する言葉にも援用した可能性もあるのである。しかし、どちらの可能性が高いかといえば、箒庵の造語である可能性の方が高い、と筆者は考えている。そう考える最大の理由は、野崎広太（幻庵：一八五七～一九四一）によって書かれた同時代の茶会記録、『茶会漫録』に、「きれいさび」という言葉が一例も見えないこと、(46)それに同時代、あるいはそれ以前の骨董、陶磁器関連書籍、雑誌記事にも、その用例を全く見出すことができないからである。いま『茶会漫録』のことについてのみ言えば、当時箒庵と共に、かなり茶道具に精通していた茶人であり、様々な茶人、道具商との交流もあった野崎が、この言葉を用いていないのは、やはりまだ「きれいさび」という言葉が、箒庵だけが使用していた評語であり、他の茶人、あるいは道具商たちには、認知されていなかったからではないだろうか。(47)

いずれにせよ、少なく見積もっても「きれいさび」という言葉を活字化し、世に知らしめた功績は箒庵にある、と断言してよいだろう。

「きれいさび」という言葉を、特定の人物に結びつけた最初の人は、箒庵をよくたすけ、『大正名器鑑』を成功裡に導いた高橋龍雄（梅園：一八六八～一九四六、以下「梅園」とする）であった。昭和四年（一九一五）に刊行された『茶道』という書物に、次のような記述がある。

> 利休時代は萬時が質素であつたが、遠州時代には追々華美になつた。それで御本尊の茶入は、利休時代の侘びその物を失はないやうに努めたけれども、その附屬品は時代の反映で、なかなか華美なものになつた。之はいはゆる遠州の「綺麗寂び」といふのである。(48)

梅園は、昭和一〇年（一九三五）刊の『茶道全集』に収載された「名物茶入茶碗」でも、「遠州取立ての中興名物茶入はいかにも豪華艶麗で、むしろ茶道の侘びや寂びにはやゝ遠ざかつたやうに思はれるが、之を茶人は遠州の『綺麗寂び』といふのである」(49)としている。また、昭和一七年（一九四二）刊の『名

物茶器傳來』にも「從來唐物大名物茶入には、嘗て見られない絢爛華麗なものであるので、遠州好みを、世に『綺麗さび』ともいふ」[50]という記述がある。ただし、その意味するところは、通常の茶道具に比べ華美なものであった、ことがわかる。

だが、梅園が遠州だけに「きれいさび」という言葉を用いていたかといえば、そうではない。彼は「仁清名物に就て」と題する文章中で、野々村仁清（生没年未詳）の「片男波（かたおなみ）」について「いかにも天下の名品である」とし、次のように述べている。

私はかやうに色彩のない侘びの茶碗は、抹茶器の名物としては異論のないものであらうとおもふ。但し赤色金銀色の華麗な光彩の畫模様は、婦人の爲に用ふる抹茶々碗としてのみ許さるべきものではなからうか。さりとも時代が既に「綺麗さび」を要求するのであるから、色彩の濃艶な所謂仁清ものが、名物としての資格を具へてゐると斷定してよいのであらうか。[51]

だが、これとて遠州とは無縁ではなかった。現在でこそ、遠州と仁清はあまり関連付けて語られないが、当時は仁清の茶器が所謂「遠州好み」に属するものである、と考えられていた。例えば、次のような文章がある。

小堀遠州の好みなる朝日焼、志士呂焼、赤膚信楽、京都には野々村仁清、（中略）何れも遠州の意匠によつて茶器を作つた。[52]

仁清の茶器は、箒庵が『大正名器鑑』を作ったことから、名物視されるようになったもので、それ以前の名物記のたぐいには掲載されていなかった。このあたりの事情については、梅園の前掲「仁清の名物に就て」という文章に詳しく述べられているが、その一部を下に引用しておこう。

箒庵翁が夙に金森宗和を尚び、又仁清陶器を愛されるゝ所から、「大正名器鑑」の名に負かず、大正時代に名物として選定されたものである。

大正以降の世相は、唯古來の如く、侘び寂びの陶器を好まず、むしろ燦爛たる光彩を好む所より、仁清物が新に名物となるのも、決して不思議ではあるまい。[53]

さりとて、梅園の理解はかなり遠州に傾斜していることは否めない。梅園は、「きれいさび」と呼ばれる茶道具が、遠州の時代に特有のものと考えていたのである。これは、現在「ひめさび」といわれるものに最も近い。また、梅園が「きれいさび」を、箒庵が考えていたよりも、華美なもの、と考えていることにも留意しておくべきであろう。ともあれ、彼によって、「きれいさび」という言葉が、かなり遠州に近づいた、といってよいだろう。[54]だが、少なくとも昭和四年から一四年までの間は、遠州に限って用いられた評語ではなかった。先に挙げた江守奈比古『遠州』の引用文に「同じ綺麗寂びと申しても遠州と宗和では横綱と三役の差があります。それ程遠州のは堂々とし

て居つて而も重くありません」とあったのも、その証左の一つとなるだろう。

そして、昭和一四年以降、先述したように、江守奈比古や西堀一三、森蘊、藤島亥治郎、重森三玲などによる、茶道、造園、建築研究論稿、ならびに評論などによって、遠州に対する評語として「きれいさび」は漸次、特化、固定化されていったのである。

おわりに

小堀遠州を評する言葉として、今ではすっかり定着した感のある「きれいさび」という言葉の成立過程を見てきた。そして以下の事が明らかになった。

①「きれいさび」という言葉を広く世に知らしめたのは、高橋義雄（箒庵）である。

②それは、主に『東都茶会記』などの茶会記録、ないし『大正名器鑑』によってなされた。

③同じく『大正名器鑑』の編纂に関わった高橋龍雄（梅園）によって遠州、あるいは遠州の生きた時代が有していた独特の美意識、として理解されていった。

④そして、江守奈比古、西堀一三、森蘊、藤島亥治郎、重森三玲などによって、遠州の美意識を表現する言葉として、固定化され、やがて一般大衆へと広まっていった。

これらの各過程には、それぞれの時代における「時代の力学」とでもいうべきものが多分に働いているのであるが、それは稿を改めて論じたいと思う。

ともあれ、「きれいさび」という言葉がうまれたことにより、遠州の茶は「遠州好み」という漠然としたものから、非常にイメージしやすいものになったことだけは、確かである。漢語と和語という、本来結びつき難い言葉をうまくつなぎ合わせているだけでなく、不自然な感じを全く与えない。「k音」と「s音」の組合せにより、きりっと引き締まった清楚な感じがよく出ており、「wa」という開口音ではじまる「わび」との違いも表現しえた、響きのよい言葉である。「きれい」という誰にでも想像できる具体的表現と、「さび」という抽象的な言葉の組み合わせも、造語の妙といえるかもしれない。そして、しばしば茶の本質といわれる「和敬清寂」の「清寂」の部分を、もしくは「閑寂清浄」という言葉を異なる語彙で表現したもの、として理解することも可能だ。だからといって、まったく問題がないわけではない。必要以上に「きれいさび」という美的概念にとらわれすぎると、遠州の茶道の本質を見失う危険性があるからである。「きれいさび」という言葉で語ることができる範囲だけではなく、そこからは漏れ落ちた要素もあわせて考えないと、遠州の茶の本質から遠ざかってしまう可能性がある。とりわけ「きれいさび」という言葉から遠州の茶道を読み解こう

とする試みには、この言葉が遠州と同時代の評価ではなく、近代的解釈の中で生み出されたものであるだけに、注意を要する。美的概念をあらわす言語は、説明するのに便利な半面、このような危険性をはらんでいることを、常に意識しておかなければならない。現に、本稿で明らかになったように、「きれいさび」という言葉は、立派に一人歩きをしていたではないか。現在の「きれいさび」に対する解釈を、原義に戻ってもう一度考え直すことも、今後必要な作業かと思われる。

（1）井上靖『きれい寂び：人・仕事・作品』、集英社、昭和五五年一一月

（2）「綺麗さび十二ヶ月――四月、小堀遠州の美学」、『和楽』第四巻第四号、小学館、平成一六年四月、一一〇頁

（3）井口海仙・末宗廣・永島福太郎監修『原色茶道大辞典』、淡交社、昭和五一年四月第三版、二八九頁

（4）林屋辰三郎ほか編『角川茶道大事典』、角川書店、平成二年五月、三九五頁。倉沢行洋執筆担当

（5）下出源七編『建築大辞典』、彰国社、昭和四九年一〇月、一二九四頁。第二版では、第二文が、「普通の寂びと異なり、利休流の古色を帯びた美に対し綺麗で華やかな美」となっている（彰国社編『建築大辞典　第二版』、彰国社、平成五年六月、一四〇一頁）。大きく異なるのは、「利休流」という言葉が追加されている点であり、千家流茶道の希求する美とは異なるということが、強調された形となっている。

（6）堀口捨己『茶室研究』、鹿島出版社、平成二年九月復刻版、二九〇頁

（7）千宗室監修・村井康彦著『茶道史』、淡交社、昭和五五年七月、一三七頁

（8）村井康彦『茶の湯人物志』、角川選書、昭和五五年六月、一一三頁

（9）江守奈比古『お茶の道具組み』、海南書房、昭和五一年七月、六三頁

（10）熊倉功夫『昔の茶の湯　今の茶の湯』、淡交社、平成六年一〇月再版、一〇二頁

（11）小堀宗慶『まごころ　日本の美と心』、婦女界出版社、平成一〇年二月、五七頁

（12）小堀宗慶『遠州流茶道宝典』上巻、昭和五八年七月、東京堂出版、一一七頁。この他、小堀宗慶は、「遠州の茶の湯は一般に『きれいさび』と言うが、この『きれい』とは派手さや豪華さではない。きっぱりとした心のきれいを言うのであって時として誤り伝えられる場合が多い」とも言っている（「小堀遠州の生涯と其の事績」中の記事、小堀遠州顕彰会編『生誕四百年記念　小堀遠州展』、小堀遠州顕彰会、昭和五三年一一月所収）

（13）小堀宗実『茶の湯の不思議』、生活人新書、平成一五年六月、二一〇～二一二頁

（14）小田栄一「遠州の好んだいろ」（小堀宗慶・小堀宗以監修『数寄大名小堀遠州の美学―「綺麗さび」展』所収、小堀遠州三百五十年大遠諱事務局、平成八年）

（15）前掲『茶室研究』、一五二～一五三頁

（16）前掲『まごころ　日本の美と心』、五八頁

(17) 西堀一三『日本茶道史』、創元社、昭和一五年九月、二二四頁。同じ引用文が、森蘊「小堀遠州の造庭」(『建築史』第三巻第三号、建築史研究会、昭和一六年五月、二五頁)にも見える。

(18) 熊倉功夫は、前掲『昔の茶の湯　今の茶の湯』において、この狂歌(熊倉は「茶の湯の道歌」といっている)からつけられたものだ、としている。

(19) 千宗室編『茶道古典全集』第六巻、淡交新社、昭和三三年一二月、五二頁。熊倉の説とは違い、古賀健蔵は『山上宗二記』に由来するとしている(「小堀遠州　きれいさびの心」野村文華財団編『きれいさびの心　小堀遠州展』所収、野村文華財団、昭和六一年三月、六四頁)。

(20) 前掲『茶の湯の不思議』、二一一頁

(21) 前掲「小堀遠州　きれいさびの心」、六四頁

(22) 前掲『茶室』、朝日新聞社、四四頁

(23) 前掲『茶道古典全集』第一一巻、昭和三六年八月、二三二頁

(24) 橋本博編『茶道大鑑』上巻、大学堂書店、昭和四八年一二月再版、七四頁。初版は昭和八年一二月発行。

(25) 上島敬二編『築山庭造伝　後編』、加島書店、平成元年一〇月、三〇頁。『築山庭造伝　後編』は、文政一一年(一八二八)の成立。翌年、公刊。

(26) 前掲『角川茶道大事典』、五一六頁。林左馬衛執筆担当

(27) 江守奈比古『遠州』(東洋美術文庫、第一三巻)、アトリエ社、昭和一四年四月、四五頁

(28) 江守奈比古・旭谷左右『茶室』、朝日新聞社、昭和二四年一二月、「茶室の観賞」中

(29) 前掲『お茶の話：茶人のわびとさび』、一三七頁。他にも前掲『茶室』(海南書房)における、大徳寺孤篷庵内にある「山雲床」の来歴説明の中に、「遠州の綺麗寂(ママ)(きれいさび)を知るためには、密庵席と共に是非一覧を要する席である」(六〇頁)という記述も見られる。

(30) 江守は、昭和三八年(一九六三)九月一七日から二二日に東京日本橋の三越で、九月一七日から一〇月六日まで根津美術館にて行なわれた、「小堀遠州展」のカタログに「遠州の綺麗さび——道具について」という一文を寄せている(根津美術館・日本経済新聞主催「小堀遠州展」カタログ『小堀遠州』、四四～四五頁)。

(31) 前掲『日本茶道史』、二二一頁

(32) 前掲「小堀遠州の造庭」、二五頁

(33) 眞鍋堅介「小堀遠州の茶道」、『庭園と風光』第二三巻第七号、日本庭園協会、昭和一六年七月、一一頁

(34) 藤島亥治郎『桂離宮』、日本出版配給統制株式会社、昭和二〇年一月、一二五頁。「きれい澁び」となっているのは、「きれい寂び」の誤りであると思われるが、億鷹編『鉢扣』(正徳二年〈一七一二〉跋)に「いらぬ所の壁によい渋(さび)」という用例があるので、一概に誤りともいいきれない。

(35) 藤島亥治郎『日本の建築』、至文堂、昭和三三年一二月、二一〇頁

(36) 山口諭助『美の日本的完成—「寂び」の究明』、寰雲舎、昭和一七年四月。この書には、「古陶磁の鑑賞的分類の我が俗間的用語の一つに、『綺麗寂び』と云ふやうな言葉も見受けられるが(例へば仁清の作品の如きが夫れに當る)、之は明る寂びを何等か意識せる用語法とも見られて興味がある」(四三～四

四頁）との記述がある。山口は、大正一五（一九二六）年に東大文学部哲学科を卒業し、哲学、古美術研究に傾倒した、とある。山口は『美の日本的完成』以前に、『無の藝術』（理想社出版部、昭和一四年九月）にも「寂び」と題する文章を載せており、「あはれ」「いき」「わび」などという美的概念との比較考察によって、「さび」の位置付けを行なっているが、そこでは『美の日本的完成』ほど、詳細な検討はなされていない。さらに、『無の藝術』では「明る寂び」という言葉は全く使用されていない。

(37) 重森三玲『小堀遠州』、河原書店、昭和二四年二月、一七〇頁。同書には他にも、遠州七窯を、「何れも綺麗寂びと言はれるほどであつて、それ等の作品は明朗で、而も豊艶で、それでゐて禪味をもつ作行を示してゐる」という表現がある（四七頁）。

(38) 熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』一、淡交社、平成元年三月、五二八頁

(39) 高橋義雄『趣味ぶくろ』、秋豊園出版部、昭和一〇年六月、四四頁

(40) 高橋義雄・今泉雄作『書畫骨董叢書』第九巻（茶道茶器及陶磁器）、書畫骨董叢書刊行會、大正一一年九月、一九九頁

(41) 高橋義雄『大正名器鑑』第六編、大正名器鑑編纂所、大正一四年一二月、一一四頁。大正九年六月二八日三井邸にて実見。ただし『萬象録』六月二八日条には「きれいさび」という言葉は見えない。

(42) 前掲『大正名器鑑』第八編、大正一五年九月、二三頁。大正一五年一月二四日高橋邸にて借見

(43) 年代の早いものから列挙すると、大正二年一二月二六日、同三年六月二二日、同六年三月九日、同八年一一月八日、同一〇年一〇月二二日、同一一年一一月一一日、同年一二月二六日、同一四年一一月一二日、同一五年一〇月一〇日、昭和二年一二月二五日、同三年一月一五日、同年六月一三日、同年一〇月六日、同四年五月二〇日、同年一二月二四日、同五年六月五日、同六年五月二三日、同一〇年一〇月二二日、同一一年一一月二六日、同一二年三月下旬（日時不明）、同年五月二五日である。その他茶会以外の記事では、馬越恭平（化生）、井上馨（世外）との思い出話「虎口を逃れた赤絵徳利」（明治四〇年頃を回想、『日本之茶道』通巻四七号、昭和一一年九月）という文章中に、赤絵徳利を評した言葉として、「きれいさび」という言葉が見える（熊倉功夫編『昭和茶道記』二、淡交社、平成一四年三月、四二五頁）。

(44) 歳暮は五例、その他、五月下旬から六月の茶会に対する用例が四例、三月が二例、一月が一例ある。このことから、晩秋から歳末、あるいは晩春から初夏にかけての茶会に使用する道具に、「きれいさび」といわれる器物、ないしは道具組をあてるのがふさわしい、箒庵は考えていたようである。

(45) 前掲『東都茶会記』五、二九四頁

(46) 『茶会漫録』中、「きれいさび」という言葉にもっとも近い表現は、大正一一年五月一九日に行なわれた磯野良吉主催の茶会において用いられた茶杓に対する評である。この茶杓は、小堀宗友作共筒、銘「事足」というもので、「あさくともよしや又くむ人もなし我に事足る蟲喰ひの竹」という歌が筒に書いてあるものである。この茶杓に対して野崎は、「見るから茶杓奇麗（ちゃしゃくきれい）

にして而も充分の寂味あり」と評している（『茶会漫録』第九集、中外商業新報社、大正一二年八月、二三〇頁）。ちなみに、野崎の評でよく使用されるのは、「結構」、「見事」、「幽寂」などの語彙である。

(47) 当時出版された陶器に関する書物にも、「きれいさび」という言葉は一切見えない。例えば今泉雄作・小森彦次『日本陶瓷史』（雄山閣、大正一四年四月）など。

(48) 高橋龍雄『茶道』、大岡山書店、昭和五年一月再版、二〇二頁。初版は昭和四年八月

(49) 『茶道全集』巻の八、創元社、昭和一一年五月、一一四頁

(50) 高橋龍雄『名物茶器傳來』、河原書院、昭和一七年五月、二四頁

(51) 高橋梅園「仁清名物に就て」、『茶わん』第三巻第六号（通巻二九号）、寶雲舎、昭和八年六月、三四頁

(52) 西隆貞『茶道銀杏之木蔭』、永澤金港堂、大正一二年四月再版、一七四頁。初版は同年三月

(53) 前掲「仁清名物に就て」、三四頁

(54) 仁清に代表される京焼を「きれいさび」という言葉でもって説明することは、それ以降も続き、現在も細々とではあるが行なわれているようである。現在、確認したところでは、高原慶三『茶盌入門』（河原書店、昭和二五年一〇月改訂版、一四二頁）にそれが見えるし、近いところでは、赤井達郎『京都の美術史』（思文閣出版、平成元年一一月、二三一頁）にそのような箇所がある。

（平成十六年十二月十四日受理）

（いわい　しげき・国際日本文化研究センター研究部技術補佐員）